

図書館と展示会

一平成18年度企画展「中国三大奇書の成立と受容」の開催一

篠塚富士男

附属図書館情報サービス課長補佐

1. はじめに

附属図書館では、10月2日～10月27日の日程で、平成18年度企画展「中国三大奇書の成立と受容—『三国志』『水滸伝』『西遊記』はどのように読まれ、描かれたか—」を開催した。そこで、この機会に図書館における展示会の開催について、その経緯や意義の問題を含め簡単にご紹介したい。

2. 図書館における展示会の開催

図書館では、平成7年以来、今年の企画展に至るまで、毎年特別展または企画展を開催している。開催時期や展示日数は、それぞれの展示会によって様々であるが、4,000人を超える入場者を数えた特別展もあり、特別展・企画展は図書館が開催する行事の中でも重要なものの一つであるといえる。

平成7年以前にも単発的に貴重資料の展示を行なったことはあったが、現在のような形での特別展・企画展の開催のスタート

となったのは、平成7年6月に中央図書館新館増築を記念して開催した特別展「天正少年使節と『原マルチノの演説』」であった。この特別展の開催に際し、当時の北原保雄附属図書館長は、展示会目録の「御挨拶」の中で「当館では、貴重書展示室が設けられたのを機に、今後とも図書館資料を広く公開してゆきたいと考えております。」と述べている。

展示会や展覧会というと、一般に美術館や博物館を思い起こすことが多いと思われる、図書館と展示会という組み合わせは、一見関連が薄いように感じられるかもしれない。しかし、「図書館資料を広く公開する」展示会の開催は、「知識・情報を収集、整理、保管して利用に供する」という図書館の基本機能（植松貞夫「附属図書館の目標と課題」、『筑波大学附属図書館報 つくばね』30巻1号所収、平成16.12）を事業として具体化したものであり、北原館長の言葉は、それ以

後の特別展・企画展の開催や、貴重書展示室における常設展示によって、継続的かつ着実に実現されている。

3. 図書館で展示会を行う意義

本学に限らず大学図書館が主体となって展示を行う例は増えており、こうした展示を行う目的や意義について、図書館職員が言及している論考も発表されている。

たとえば早稲田大学図書館の松下真也氏は、平成8年に発表した論考で図書館における展示会の目的を次の4つに分けている。

- ①メモリアル・セレモニーとしての展示会（例：大学・図書館等の記念行事の一環としての展示会）
- ②教育・研究目的の展示会（例：学会開催と連動した展示会）
- ③図書館の広報・利用者教育の一環としての展示会
- ④エンターテインメントとしての展示会

そして、これまでの展示会としては①②のタイプのものが多いが、「展示会という形式でメッセージを伝える」ような③のタイ

プのものや、さらには、④の「利用者の娯楽」のための展示会も企画されてよいのではないか、と述べている。

同氏は平成15年に再び展示会について論じているが、その中では、早稲田の近年の展示会は従来多かった①②のタイプのものから少しずつ傾向を変え、おもに学部学生を対象とした、たんなる貴重資料の羅列ではない多様な展示を試みるようになった、という趣旨の記述をしている。これは、①②のタイプの展示会はもちろん行いながらも、この7年の間に③や④のタイプも重視する傾向に移行しつつあることを示している。

また東北大学附属図書館の米澤誠氏は、平成17年に発表した論考で図書館展示の意義として次の3つをあげている。

- 1) 啓蒙活動としての図書館展示
 - 2) 広報活動としての図書館展示
 - 3) 人材育成活動としての図書館展示
- ここでは、展示に関連する対象者・グループを三つに大別し、それぞれの立場からみた意義を分析しているが、これを簡略化すると次の表のようにまとめることができる。

表 図書館展示の意義（米澤氏の論考から作成）

展示のねらい	対象者・グループ	展示の意義
啓蒙活動	展示会観覧者・利用者	資料への興味・知識欲の向上・図書館資料の活用
広報活動	図書館・大学	社会へのアピール・地域貢献
人材育成活動	図書館職員	企画力・専門的知識・活性化

同氏の整理によって、図書館展示には観点の違いによって多様な意義を見出せることが明らかになったが、これは松下氏が③④のタイプの重視の傾向について述べていることとも相通ずるもので、近年の大学図書館を取り巻く状況に即応した分析であるといえる。

ここで見た両氏の分析や視点は、本学の特別展・企画展においても、ほとんどそのまま適用できる。

すなわち、本学においても、開催目的としては松下氏の分類の①②に相当するものが多い。また、貴重な資料の現物を広く公開することによって、資料への興味を喚起し、それが図書館資料の活用へとつながることを展示の主要な目的として開催してきたが、これは啓蒙活動としての展示という色彩が強いものといえる。しかし、広報活動や人材育成活動としての展示という、いわば開催者側に関わる観点も確かに重要であり、特に展示を通じての広報活動・地域貢献の問題については、本学でもその重要性を十分認識して実際の展示の企画立案・運営の内容に反映してきた。

さらに、特別展等の企画・展示準備の過程での研究者の調査・研究が、大きな成果を生み出す契機となることもある。平成12年の特別展「筑波大学附属図書館所蔵 日本美術の名品～石山寺一切経、狩野探幽・

尚信の新出屏風絵と歴聖大儒像～」における、狩野探幽・尚信・田村直翁の新出屏風絵の「発掘」というきわめて大きな発見は、その好例であるが、特別展の企画・展示準備という形で、図書館が幅広いさまざまな分野の研究者同士に新たな交流の場を提供し、集中的に調査・研究を行った結果、新たな発見・成果を得ることができれば、図書館展示を「資料の公開→調査・研究→発見・成果→次の研究へ」という資料を活用した研究のサイクルの中に位置づけることもできよう。

4. 18年度企画展—研究開発室との連携

今年の企画展には、これまでの特別展とは異なった特徴があった。それは、附属図書館研究開発室との連携のもとに企画・開催された、ということである。すなわち、附属図書館の企画展であると同時に、研究開発室の大塚秀明先生（人文社会科学研究科）のプロジェクトの一環でもある、という位置づけになっている。このため、図書館の内部からの企画という意味で、特別展ではなく企画展という名称を用いることとした。また、プロジェクトの一環でもあるので、従来の特別展よりも自由度が高く、実験的な試みも行われることとなった。

今回の企画展の目的は「中国三大奇書に関する貴重な資料及び基本図書を『成立と

受容』という観点でピックアップして一般に広く公開するとともに、和漢古書等の図書館資料についての大学における研究と活用のあり方を示すこと」であったので、貴重資料だけではなく基本図書も展示すること、およびこれらを利用した「研究と活用のあり方」を示すことに重点がおかれた。こうした基本的な方針に基づき、従来はほとんど展示の対象としていなかったマンガや映画、アニメ等についても、展示・講演のストーリーの上での必然性があれば、展示品に加え、あるいは講演で取り上げることとした。その結果、「たんなる貴重資料の羅列」ではなく「教育・研究」から「エンターテインメント」までの要素をも含む、多様な見方のできる展示を行うことができたと考えている。

さらに、開催形式として研究開発室と連携した展示会というスタイルを実現できたことの意味は大きい。研究開発室の業務には、図書館資料の保存等に関する調査・研究が含まれているので、研究開発室と連携することにより、単に展示会の企画の自由度の向上や実験的な試みの実施が可能になったというだけでなく、展示会を行うことの客観的な評価や、それが資料の保存・公開・活用にどのように影響するか、あるいは研究者にとって資料を活用した新たな研究のサイクルの中で図書館展示がどの程

度有効に機能するか等の問題について、今後も継続して研究・実践する場が確立できたことになる。今年の貴重な経験を踏まえ、次年度以降も、さらに充実した展示会の開催を目指していきたい。

*なお、企画展のオフィシャル Web ページ

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/sandaikisho/> では、企画展終了後も電子展示を見ることができるようになっています。ぜひご覧ください。

(しのづか ふじお)



図 企画展チラシ (表)